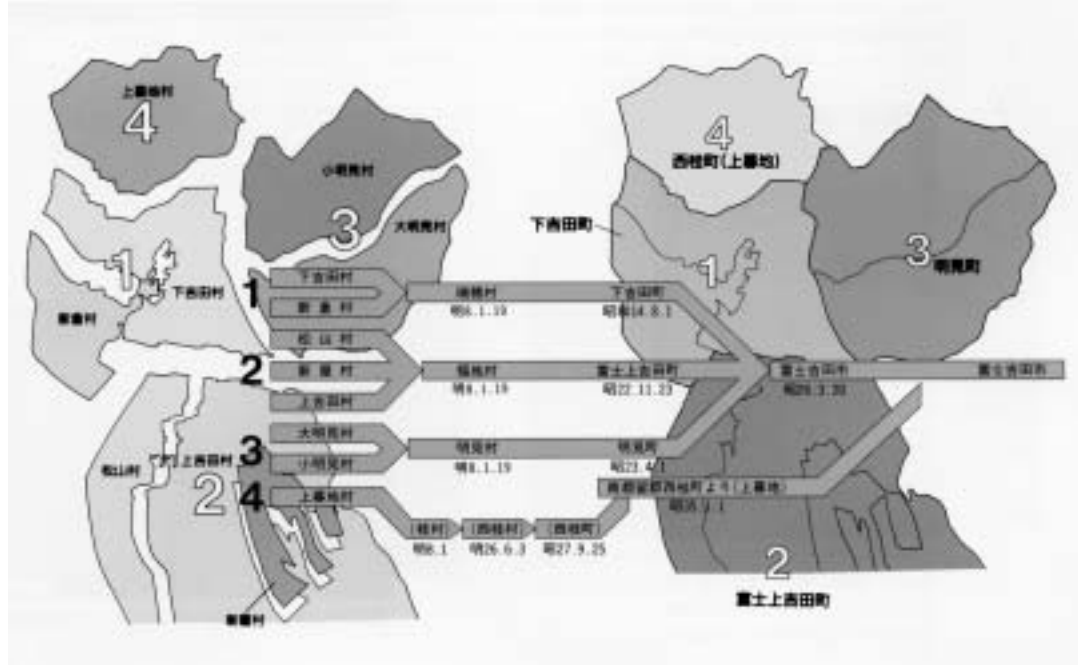


富士吉田あれこれ

吉田へ行く



■ 町村合併の変遷

「平成の大合併」といわれるように、近年市町村の合併が相次ぎました。山梨県内においても合併が推進され、かつては64を数えた市町村（平成15年3月以前）も現在では13市9町6村の計28市町村（平成18年8月現在）まで再編されています。富士北麓の地域では、平成15年から旧河口湖町を中心として北麓西部の町村が合併して富士河口湖町となったのは、記憶に新しいところです。このような合併施策は、明治時代から行われており、「明治の大合併」「昭和の大合併」「平成の大合併」と近代以降3度の大きな地方行政区の再編が行われてきました。

明治21年(1888)に市制及び町村制が公布、翌年施行された「明治の大合併」といわれる町村合併の推進によって7万を超える町村が約5分の1までに再編されました。江戸時代以前から続く地縁共同体としての町村の枠組みが取り払われることは、単なる行政区の変更というだけにとどまらず、当時の住民にとって生活の基礎が大きく変わ

るような変化であったと思われます。「昭和の大合併」は、昭和28年(1953)の町村合併促進法に基づいて実施されました。続いて昭和31年(1956)の新市町村建設促進法を経て、昭和36年(1961)までに9千を超える自治体が約3分の1までに再編されました。

さて、合併による地域の統合に対して住民はどのように意識していたのでしょうか。市域の例では、合併後、新しい行政区で括られただけで、それまでの地域的な意識というものをはっきりと残してきたようです。三方を山で囲まれ、地図上では一つのまとまりにも見える富士吉田市内ですが、市として誕生する以前は、各町村に分かれていました。昭和26年(1951)に市制施行されて以来、半世紀を過ぎた今でも旧来の区分を基にした生活感覚といったものが住民の意識下に色濃く残されていることがわかります。このことは、この地域のみならず、全国的にみられる傾向といえるでしょう。

この「地域」に対する意識の一例

をあげてみます。市域において「吉田」とは商業的な中心地である「上吉田・下吉田」を示し、その周辺地区では同じ市内であるにもかかわらず「吉田へ行く」という表現が今でも日常会話のなかで用いられていることがあります。このことは地名としての場所を意図した表現ではなく、他所の場所へ出かけるという意味合いの方がより強いものでした。このような表現は、50歳代後半以降の方が多く、ちょうど市制施行の時期と合致します。市内の明見地区の方に話を聞いてみると、「川(桂川)の向こう(吉田)に行く」ことなど全く別の世界へと出かけるのに近い意識があったそうです。

このように「平成の大合併」が一段落ついた今でも「昭和の大合併」の名残を振り返ることができますが、それは住民の世代交代によってかつての地域間の意識は緩やかに失われつつあるようです。そもそも「地域」という言葉は、近隣などの狭い範囲から市町村などの広域的な範囲まで幅広く使用されて

いるものです。そして、それは時代とともに「地域」という広がりや、生活圏などの範囲の拡大に伴って変化してきました。

市制施行から半世紀を経た今、過去50年を振り返って富士吉田の町がどのように歩んできたか、そして、将来富士山北麓の近隣地域とどのようにかかわっていくのか、今後、少なからず変化があることと思われます。2008年には山梨・静岡両県を跨いだ「富士山ナンバー」の車両ナンバープレートの運用が開始されることとなっています。これは県を越えた枠組みであり、富士山を中心とした一つの「地域」の表れといえます。富士吉田市もこのことを契機に合併するのも面白いかもしれません。いずれにしても富士山がある限り、富士吉田市は富士山とともに歩いていくことでしょう。

(布施光敏)

参考文献

- 「富士吉田市史史料編第七巻」近・現代Ⅱ 1995富士吉田市
- 「日本歴史大事典2」2000小学館

忍草を歩く

はじめに

忍野村忍草地区は、富士山信仰の霊場の一つにも数えられ、「忍野八海」が有名ですが、この地区には数多くの文化財や寺社があり、富士信仰についても興味深い

八湖信仰

忍野八海は富士山の伏流水が溶岩の亀裂箇所から湧水している池で出口池・底抜池・銚子池・濁池・湧池・お釜池・鏡池・菖蒲池の八つの湧泉の総称です。山中湖とともに桂川の水源地であり、付近及び下流の村々の飲用・灌漑用水として古来より用いられてきました。昭和9年(1934)に国の天然記念物に指定され、昭和60年(1985)には環境庁の名水百選にも選ばれました。

この忍野八海は、かつては「富士御手洗元八湖」と称した富士山信仰の霊場でもありました。ここを巡礼する八湖信仰は、富士山信仰の元祖である長谷川角行の富士八海修行になぞらえたもので、内八海・外八海と比べ小規模であったため八湖と名づけられたのではないかとされています。(※)

江戸末期には衰退した信仰でしたが、天保14年(1843)に八代郡市川大門村長である友右衛門を中心とする「大我講」が八湖信仰の再興を發願し、忍草の東円寺旦徒総中と協力して資金を調達し、八湖の道を整備して池を浚い、八大竜王を祀る詠歌を刻んだ石碑を建立しました。こうして富士登山者が霊場としての八海で水浴して身を清め、忍草浅間神社に参詣して御印敷を請け、東円寺に宿泊するという八湖信仰が再興しました。

元八湖信仰の再興を發願した友

資料が残されているところでもあります。

今回は、平成18年9月に当館歴史散歩として散策した忍野八海と忍草浅間神社、東円(圓)寺を中心に紹介します。

右衛門は市川大門村の資産家で、学問にも精通していた富士講の先達でした。忍草浅間神社別当東円寺と巧みに連携しながら、時には東叡山(上野寛永寺)の力をたよりに信仰を再興させ自講の発展に努めました。一方、東円寺もこの再興によって忍草浅間神社とともに繁栄し、武州多摩郡千ヶ瀬村の講では浅間社修復料と東円寺庫裡再建費を寄進するなど、信心深い参詣者による寄進も相次いだようです。なお、「大我講」は市川大門村から関東一円に広まり、各地から忍草への巡礼者がやってきたようです。

しかし、この信仰も明治時代に入り富士講とともに次第に衰退し、その名残として現在、八大竜王を祀り詠歌を刻んだ石碑と、八海近くの民宿「原の家」敷地内にある「元八湖信仰再興」の碑が残されているのみです。池の石碑には、山に3つの丸の大我講の笠印(富士講のマーク)が刻まれています。

※ 内八海と外八海があり、内八海は富士五湖と明見湖・四尾連湖・泉瑞が近世富士講の代表的な巡礼の地でした。(岩科小一郎『富士講の歴史』及び井野辺茂雄『富士の歴史』)



■ 忍野八海範囲図



■ 元八湖信仰再興の碑



■ 元八湖再興絵図



■ 大我講の笠印

忍草を歩く

忍野八海

第1番の霊場「出口池」^{でくち}

祭神 難陀竜王

あめつちの
ひらけるときにうごきなき
御山の水の出口とふとし

村の出入り口にあり、八湖で一番大きな池。精進池ともよばれ、富士登山者の褌の場所だったという伝説があります。



第2番の霊場「お釜池」^{かま}

祭神 跋難陀竜王

ふじの根の
ふもとの原にわきいづる
水はこの世のおかまなりけり

昔は釜の中に湯が沸くように水が湧き出ていたと伝えられています。または、大蒲（かえる）が住んでいたという伝説に結び付けて「大ガマ池」がその由来ともいわれます。



第3番の霊場「底抜池」^{そこぬけ}

祭神 姿迦羅竜王

くむからに
つみはきへなん御仙の
ちかひぞふかきそこぬけの池

楕円形の池で、底には泥が積もっていて一見深さがわかりません。この池に物を落とすと行方不明になり、お釜池に出てくるといわれています。



第4番の霊場「銚子池」^{ちょうし}

祭神 和修吉竜王

くめはこそ
銚子の池の さわくらん
もとより水になみのある川

銚子の形をした池。昔、花嫁が式の中におならをしてしまい、恥ずかしがって銚子をだいて池に身を投げたという言い伝えがあります。縁結びの池とされています。



第5番の霊場「湧池」^{わく}

祭神 徳叉迦竜王

今もなほ
わく池水に守神の
すへのせかけてかわらぬぞ知る

もっとも多く水が湧く深い池。セキシウモが茂っています。富士山が噴火して村人が水を求めたとき、富士の神がその声に応じて水を湧かせたという言い伝えがあります。浅間神社のお祭り（5月3日）には神輿をこの池で洗い清めます。



第6番の霊場「濁池」^{にごり}

祭神 阿那婆達多竜王

ひれふらす
龍の都のあらましき
くみてしれとやにごる池水

川の一部のようなところにある浅い池。言い伝えでは、もとは飲用の澄んだ水でしたが、ある日、みずほらしい行者がきて、近くの家で水を求めました。ところがその家の老婆が断ったため、池の水が濁ったとされます。



第7番の霊場「鏡池」^{かがみ}

祭神 摩耶斯竜王

そこすみて
のとけき池は これぞこの
しろたへの雪のしつくなるらん

晴れた日は、富士が水面に映りこむとされます。昔はこのしろ池とよばれていました。富士山の八合目にも「このしろ池」という池が雨期だけ現れますが、その池の水が麓で湧き出したのが、この池だともいわれています。



第8番の霊場「菖蒲池」^{しょうぶ}

祭神 優鉢羅竜王

あやめ草
名におふ池は くもりなき
さつきの鏡みるこゝちせり

病気の時はこの菖蒲をとって体に巻くと治るといいう言い伝えがあります。



忍草を歩く

忍草浅間神社

忍草地区の氏神社で、富士山の女神である木花開耶姫命を祀ります。江戸時代には、忍草を訪れる富士講の拠点的な施設でした。明治の神仏分離令が施行されるまでは、神道と仏教が一体となった状態であったので、別当寺である東円寺の管理下にありました。

神社の起原は不明ですが、鎌倉時代に創建されたと伝えられています。本殿は、慶長18年(1613)の棟札が残されていますが、その建築年代はそれ以前にさかのぼるようです。

神社の縁起によれば、建久4年(1193)に鳥居地峠(仁王坂)に金剛力士像2体を建立したと伝えられています。この金剛力士像については、仁王坂にあった仁王(金剛力士)が忍草の浅間神社に移されたという同様の伝説が市内大明見に残っています。現在の金剛力士像が納められる隋神門は近年に再建され、安置されている金剛力士像も修理されています。

また、国指定文化財となっている正和4年(1315)の銘がある3体の神像が祀られています。



■ 忍草浅間神社

木造女神坐像1 軀と 木造男神坐像2 軀 (国指定重要文化財)

本殿に祀られる女神像は浅間神社の主神である木花開耶姫であると伝えられます。女神像に向って右には鷹飼、左には犬飼と伝えられる神像が祀られています。女神像はふ

っくらとした輪郭に黒い髪を垂らし、太い眉、やや開いた口に塗られた鉄漿など、生身の貴人の女性のように生き生きと表現されています。鷹飼、犬飼は後頭部で髪を束ねて坐しています。鷹飼は太く眉を描き、鉄漿をぬるなど、主神の女神と同様の表現もみられます。富士山にまつわる説話にはかぐや姫に関するも

のが見られ、その中では犬飼・鷹飼という老夫婦がかぐや姫を育てます。このことから、富士山の研究者の中にはこの3像をかぐや姫とその養父母と考える人もいます。

3つの像の底には墨書があり、正和4年(1315)に丹後国の石見(坊)静存という仏師が造ったこと、「別当東円寺」という名前が入っている

ことが確認されています。東円寺所蔵の聖観音坐像にも同じ仏師の名前が書かれていることから、同時期に造られた神像と仏像が、明治の神仏分離で寺と神社に離れ離れになったと思われます。

この3体は平成17年6月9日に国の重要文化財に指定されました。



■ 木造男神坐像(犬飼)



■ 木造女神坐像(木花開耶姫)



■ 木造男神坐像(鷹飼)

〈犬飼坐像 墨書〉
別当東円寺
正和四年 乙卯 十月廿三日辰時
大才
仏師丹後国住人石見坊

〈木花開耶姫坐像 墨書〉
うんけいほういんひこ
正和四年 乙卯 十月廿三日たつとき
大才
仏師丹後国住人石見しょうそん(花押)
別当東円寺

〈鷹飼坐像 墨書〉
別当
東円寺
正和四年 乙卯 十月廿三日辰時
大才
仏師丹後国住人石見坊
静存(花押)

忍草を歩く

忍草山東門寺 天台宗

鎌倉時代初頭まで忍草一坊南泉寺と称しましたが、正治元年(1199)に忍草山東門寺と改めました(『忍野村誌』)。近代に至るまで、朝日浅間神社(現忍草浅間神社)の別当寺として神社を管理し、富士講がたびたび訪れる、元八湖の拠点的な場となっていました。

寺は文化年間(1804~1818)に一度、建物を火災で失います。その後本堂は文化4年(1807)に再建、庫裏は弘化4年(1847)、鐘楼門は慶応元年(1865)に建てられました。現在の本尊は阿弥陀如来ですが、火災を免れた古い本尊は中世にさかのぼる大日如来です。また、北口一合目にあったという不動明王像も祀られています。



■忍草山東門寺

大日如来坐像 (古本尊)

素朴な風貌のこの像は、古本尊とよばれる大日如来坐像です。

大日如来は天台宗や真言宗など密教の最高位の仏とされる他、江戸時代には浅間明神、つまり富士の神の本地仏とされていました。本地仏とは日本古来の神が仏教の仏の姿で現れたものです。

大日如来は、阿弥陀如来や薬師如来などの通例の如来とはその外見が異なります。他の如来は肉髻にっけいといい、頂に肉の盛り上がった頭の形で表現されますが、大日如来は髪を高く結い上げたスタイルです。また如来は通常、宝冠や瓔珞うろうろく(首飾り)といった装飾をまといませんが、大日如来に限っては冠をかぶり、瓔珞などの装身具をつけた姿で表されます。

密教が伝来したとき、大日如来

はそれまでの仏教の仏とは違う、現世利益を肯定した仏であると認識されました。その特性が仏像にも表されているのです。

密教では、胎藏界たいざうかいと金剛界こんごうかいという2つの世界観があります。この像は右手の肘より先を欠失していますが、残った左手の形から左手の人差し指を右手で覆う智拳印ちけんいんを結んでいたのではないかと推測され、金剛界の大日とわかります。装飾は頭部に大きな冠を載せるのみで、裸の上半身に一筋の布を斜めにかけています。内刳りうちくはなく、両腕以外は一つの材木を彫った一木造です。

江戸時代の山梨の地誌を記した『甲斐国志』には古本尊大日の膝下に銘文があると記されています。山梨県教育委員会県史編さん室の調査により、この記載通り大日如

来からは「東門寺開山本尊」と、「天正六年」(1578)の墨書がみつかりました。古本尊の名の通り、中世に

さかのぼる古い本尊だったことがわかります。



■大日如来坐像(古本尊)

(大日如来坐像 墨書)

東門寺開山本尊 覺乘坊
 天正六戊寅五月

天野

□□ (梵字か)

九郎左門

忍草を歩く



■ 聖観音坐像

聖観音坐像

聖観音とは、いわゆる観音菩薩のことです。観音菩薩には十一面観音や馬頭観音など、多種多様な観音菩薩がありますが、そのような変化観音と区別して、一番基本形の観音菩薩を特に聖観音とよびます。観音菩薩の特徴は、教典によると冠の正面に小さな如来をつけていることで、これを化仏といいます。また、水瓶や蓮華の花を持ちます。この像は左手をかくく握っていますが、おそらく蓮華の花を持っていたことでしょう。

高く髪を結び上げ、うねるような衣文が華やかな仏像です。体の大部

分を一材で造る「一木造」で、内割りはありません。目は水晶でできた玉眼ぎよくがんですが、後頭部を割って水晶をはめ入むという、他であまり見られない方法をとっています。

像の底には墨書があり、「ふんほう(文保)四年」「ひこ石見しやうそん(静存)」と記されています。

これにより文保4年(1320)に浅間神社の神像3体と同じく静存という仏師が造った仏像であることがわかります。



■ 像底部

〈聖観音坐像 墨書〉
ふんほう四年六月一日
たん後わらへちしや
ふんしうんけいはういの
ひこ石見
しやうそん(花押)

不動明王二童子像

～富士山から降ろされた仏像

明治時代に入るまで、富士山は神も仏も在る神仏習合という信仰の世界でした。しかし、明治政府により神仏分離令(※1)が発せられると、富士山は神の山として神道に統合され、山内に祀られていた仏像は山から降ろされ、或いは打ち壊されました。その中で麓に降ろされた仏像たちは、富士吉田市内外の寺院や個人宅に保管されているものがありますが、その全貌はわかっていません。

この東円寺にも、富士山に祀られていたと伝えられる不動明王像があります。当寺に伝わる明治11年(1878)の「不動尊永代護摩講連名簿」によると、この不動明王像は江戸時代に富士山一合目の鈴原に安置されていたもので、明治になってから上吉田の人達によって東円寺に移されたものです。

『甲斐国志』(神社部)(※2)には、富士山の一合目鈴原に大日如来を祀ることが記されます。ここに不動明王像に関する記述はありません



■ 一合目鈴原社

■ 不動明王二童子像
不動明王像 像高71.6cm
制陀迦 像高43.8cm
矜羯羅 像高44.2cm

忍草を歩く

東円寺の不動明王像は立像で、向かって右前方に制叱迦、左前方に矜羯羅というお付の童子を従えています。右手には剣を持ち、左手には索(綱)を持っています。この剣と索で仏教の敵を降伏させる荒々しい仏です。髪は卷毛で、左に一筋の弁髪という毛筋を流し、頭の頂には蓮華の花を乗せています。これは不動明王特有の髪型の1つです。目は水晶をはめ込む玉眼という手法ですが、これは鎌倉時代以降によく用いられました。体はいくつかの木材を寄せ合わせた「寄木造」です。彩色は貝殻を焼いて粉末にした胡粉を下地としてその上に彩色が施されています。この手

法は15世紀以降に行われ、江戸時代を通して多くの仏像にみられます。不動明王の姿は「不動十九観」(※3)とって、左目を閉じて左右の牙を違う向きに向けて食いしぼるなど、独特の大きな表現をすることが多くありますが、この像の場合は両目が正面を向き、左右の牙が両方とも同じ向きに描かれるなど、穏やかで古典的な表情となっています。

※1：神道と仏教を明確に分けるため、明治新政府が慶応4年・明治元年(1868)にかけて発令した12の法令を総称して神仏分離令という。明治8年に信教自由の口達が出るまでその影響により全国で多くの寺院や仏像が破却された。

※2：甲斐国志より
一大日如来社
富士ノ麓鈴原ト云フ地ニアリ是レ富士登山道最初ノ社ナリ
按ルニ大日ハ浅間明神ノ本地仏ナレバ中古此地ニ祭りテ参詣ノ諸人ニ先ヅ其ノ本地ヲアカセルナルベシ
勝山記ニ享禄三年三月驪ガ馬場ノ大日堂炎焼同大日焼メサレ候トアレバ勸請ノ年曆猶旧キコトナルベシ
鈴原ノ辺又驪ガ馬場ト云

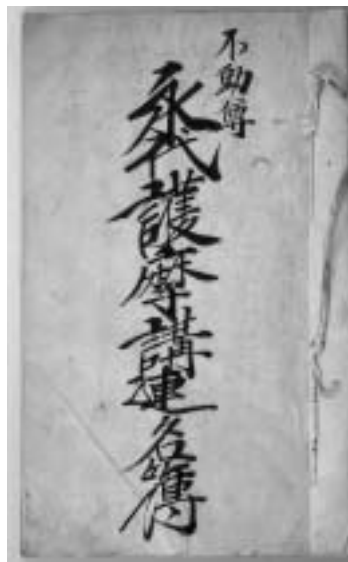
※3：不動十九観とは、不動の特徴を19項目取り上げたもの。9世紀末に天台宗の安然などで説き、広まった。19項目のうち16項目が図像に関するもので、それによると①頭には7つの髻を結び②左に編んだ毛束(弁髪)を垂らし③額に水波のような皺④左目を閉じて右目を開く⑤下の歯で右上の唇を噛み左下の唇を外へ出す⑥口を固く閉じる⑦体は童子のようで肥満してい

る⑧体の色は青黒く⑨右手に剣⑩左手に索⑪剣には竜が巻きつく⑫矜羯羅・制叱迦を従え⑬磐座に坐し⑭体が迦樓羅炎に包まれる。⑮火生三昧に住す⑯怒りの相であるという。

「不動尊永代護摩講連名簿」緒言

(読み下し)

「当山不動尊ハ古江戸某富士山一嶽鈴原ニ安置シ奉シ事ハ人ノ知ル処ナリ、御一新ノ始メ云々ニヨリ旧上吉田稲田氏外二名申合小室ヲ営ミ安置シ心信怠リナケレバ感応モ随テ有、或夜稲田氏夢ニ忍草山エ遷座セント夢覚テ不思議ヲナシ明ルヲ待テ外二名エ告ルニ同夜同夢、茲ニ於テ昨年当寺エ奉納、予思フニ不動明王靈現限りナケレバ現当二世安樂火盜潜消蚕娘満足ノ為年々旧二月二十八日護摩法ヲ修シ帙ヲ施シ度、各々心信ノ人ハ同日参詣アラハ愚心ノ快樂之事ニ過キズ 現東円寺住職 鷹野證教誌 明治十一年三月日」(後略)



■不動尊永代護摩講連名簿

(大略)

不動像は昔、江戸の某が富士山一合目の鈴原に安置したもので、そのことは多くの人に知るところである。明治の(廃仏稀釈の)ため山から降ろされ、上吉田(富士吉田市)の稲田氏と他二名がお堂を建てて祀っていた。ある日、稲田氏がこの不動像が「自分は忍草山(東円寺)に移りたい」と云う不思議な夢を見て他の二人にも話したところ、他の二人も同じ夢をみていた。そこで昨年(明治10年か)不動像を東円寺へ安置した。私(證教)が思うに、不動尊は靈験あらたかなので、子孫繁栄、災難消失、養蚕順調祈願の為、毎年旧暦2月28日に護摩を焚いて書物(札か)を配りたい(*)。信心深い人々は同日に参詣してもらえたら私としてもこの上ない喜びである。
東円寺住職 鷹野證教 明治11年3月日

* 現在も東円寺では毎年1月28日、東円寺と近所の人たちによって不動明王を祀る護摩焚きが行われています。警察署からも交通安全を願い、参拝に訪れます。
(高橋晶子・布施光敏)

参考文献

- 「甲斐国志」第三巻 1968 雄山閣
- 「古原の民俗」1984 富士吉田市
- 「忍野村誌」1・2巻 1989 忍野村
- 「山梨県史」文化財編 1999 山梨県
- 「仏教美術事典」中村元・久野健 2003 東京書籍
- 「新出「浅間大菩薩縁起」にみる初期富士修験の様相」(『史学』第73巻第1号)西岡芳文 2004
- 「山梨県史」資料編 7 中世 4 考古資料 2004 山梨県
- 「月刊文化財」6月号(501号) 2005 文化庁文化財部
- 「富士山の祭神論」竹谷敏貞 2006 岩田書店
- 「東円寺と元八湖霊場」天台宗東円寺住職 鷹野慈誠

上中丸遺跡確認調査報告

1. 調査の経緯

上中丸遺跡は、向原地区に位置します。現在は、水田が広がりますが、縄文時代中期末（約4,500年前）と弥生時代前期後半（約2,400年前）に、人々が生活していた場所です。

2. 立地と環境

上中丸遺跡は、大沢川と小佐野川という二つの川が合流する地点の西岸に広がります。小佐野川より50m程西側は、古墳時代に富士山から流下した檜丸尾第1溶岩に

この遺跡地内で、市道の整備と区画整理が行われる予定のため、事前に遺跡の広がりを確認する目的で、確認調査を行いました。今回は、その成果を報告します。

覆われています。上中丸遺跡に人が住んでいた縄文時代中期末と弥生時代前期後半には、存在しなかった溶岩であり、遺跡はその溶岩の下にも広がっていると考えられます。また、今は、その溶岩のために、遺跡より上流側で道志山地へ向かって大きく迂回し、遺跡と道志山地の間を流れる小佐野川も迂回することなく、遺跡の西側をまっすぐに流れていた可能性があります。

檜丸尾第1溶岩の下には、更に縄文時代早期に富士山から流下した猿橋溶岩が流れています。そのため、遺跡に人が暮らしていた当時は、大沢川はせき止められ、隣の古原地区に広がる明見湖のように、せき止め湖を形成していたと考えられています。山に囲まれながらも日照条件の良かった上中丸遺跡は、このように水にも恵まれていたため、当時の人々にとって暮らしやすい場所であったといえるでしょう。



■ 図1 遺跡位置図 (1/4,456)



■ 遺跡とその周辺 (東から)

3. 遺跡の概要

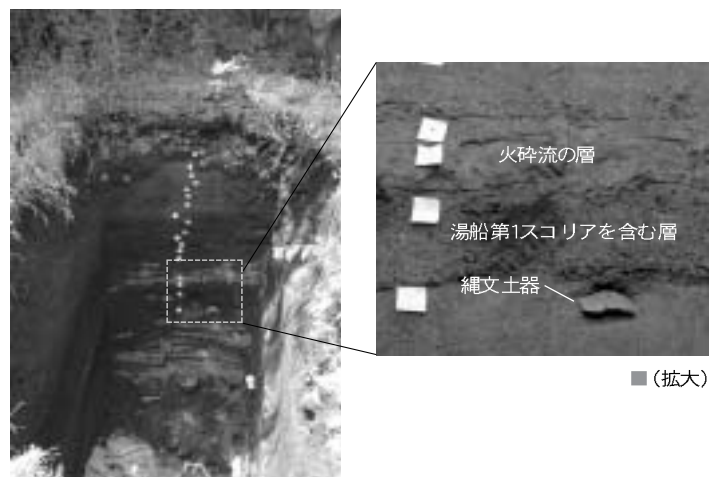
上中丸遺跡は、大沢川により道志山地から流されてくる土砂と富士山の噴火による分厚い溶岩や火山灰によって覆われています。

弥生時代の人達が生活していた地面（以下、生活面とする）は、地表下60cmの深さで確認されていますが、更に150cm下に、縄文時代の生活面があります。

この縄文時代の面を覆う厚さ150cmの土は、全て富士山の噴出物で形成されています。そのなかでも、縄文時代後期（約3,500年前）

に噴出した湯船第1スコリアとそれに連続する火砕流の層は、約90cmにも及ぶ厚さを持ちます。それだけでなく、この火山灰中には、伊豆半島の天城火山の噴出物も含まれており、同時期に、富士山だけでなく、天城火山も噴火していたことが分かっています。当時の人々が、甚大な被害を被ったであろうことは、想像に難しくありません。

なお、縄文時代の生活面とその下も富士山の火山灰で埋もれており、当時の富士山が連綿と噴火し続けていたことが分かります。



■ 遺跡の土層

■ (拡大)

上中丸遺跡確認調査報告

それでは、次に、各時代の調査成果について紹介していきます。

弥生時代

この時代の生活面からは、弥生時代前期後半に用いられた土器が出土しています。狭い範囲の調査であり、当時の住居や墓の跡は確認できませんでしたが、いくつかの穴の跡や火を用いた証拠となる赤く焼けた土と炭化物の集中が確認でき、弥生時代の人々がここで暮らしていたことが確認できました。出土している土器は、水神平系条痕文土器と称されるもので、一早く稲作技術を導入していた西日本に続いて、東日本も稲作を行うようになった時期に用いられた土器です。

同時代の遺跡は、市内の山ノ神戸遺跡や富士河口湖町の鳥

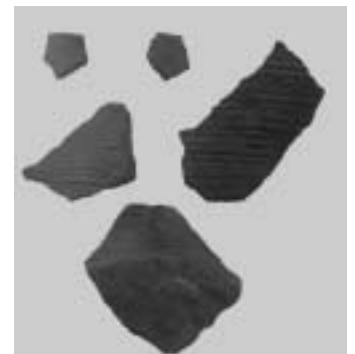


■ 弥生時代の土器が発見された層

原遺跡などがありますが、いずれも生活していた期間が短く、住居址も見つかっていません。また、本遺跡と同じく、台地上ではなく、水辺により近いところに遺跡が立地しています。同じ頃には甲府盆地

において稲作が行われていることから、そのために必要な水を得るために、台地より適している低地へと居住の場所を変えたとも考えられます。

上中丸遺跡に住んだ人も、この



■ 出土した弥生土器

時期に稲作を行っていたのか否か、今後の調査を通して明らかにできるかもしれません。

縄文時代

地表下2mの地層から縄文時代中期末に用いられた土器が出土しています。狭い範囲の調査であったため、住居の跡などの明確な生活の痕跡を確認することができませんでしたが、大型の縄文土器の破片や焼けた土、炭化物が集中する箇所があり、この時期にも同地で生活の営みがあったことを確認することができました。

また、かつて当地が湖であったことも分かりました。先述した大沢川がせき止められてできた湖が、遺跡まで広がっていたのです。その証拠は、縄文時代中期末の生活面の20cm下にある土層にありま

す。この土層は、粒の小さい火山灰と大きい火山灰が交互に何十にも堆積したものですが、これは、水中特有の堆積状況です。つまり、この土層が堆積した縄文時代中期



■ 縄文時代の土器が発見された層

末より以前には、当地は水面下にあつて、人が生活の場とした中期末になるまでのいずれかの時期に陸地化した可能性が高いことを示しています。



■ 出土した縄文土器

4. 今後の予定

平成19年度から、本格的な発掘調査を行う予定です。調査を通して、文中で触れた課題についても、その謎を解くことができるはずで、調査成果については、随時に公開していきたいと考えていますので、ご期待ください。

(篠原武)

参考文献

- 『富士吉田市史』史料編第1巻自然・考古 1998 富士吉田市教育委員会
- 『歴史を探るサイエンス』 2003 国立歴史民俗博物館
- 『炭素14年代測定と考古学－国立歴史民俗博物館研究業集－』 2003 国立歴史民俗博物館編
- 『山梨県史』通史編 原始・古代 2004 山梨県教育委員会
- 『放射性炭素年代測定による富士火山噴出物の再編年』『火山』52 山本孝広ほか 2005

博物館からのお知らせ

平成19年度 企画展

『モノからみた富士信仰—新収蔵品展—』
6月16日(土)～9月2日(日)

『御師家のアルバム』
9月15日(土)～10月21日(日)

平成18年度博物館実習

8月1日～11日の10日間、3名の博物館実習生が学芸員資格習得のために学んでいきました。



御師外川家住宅

市指定文化財の外川家住宅の整備工事を進めています。平成19年3月末までには、本体工事を終え、平成19年度中の公開に向けて、展示等の内部の整備を実施していきます。



日	項目	内容
1日	オリエンテーション	諸注意等/館内見学
	博物館概要説明	施設運営・財務/事業紹介
2日	館外実習(施設見学)	付属施設/レーダードーム館
	体験学習準備	縄文土器作り教室準備等
3日	資料の扱い方Ⅰ	受入と収蔵
4日	資料の扱い方Ⅱ	民俗資料の実測/写真撮影
	資料の扱い方Ⅲ	考古資料の取り扱い
5日	受付/レファレンス	受付業務/観覧者対応
6日	体験学習実施	縄文土器作り教室実施
7日	資料の扱い方Ⅲ	受入と収蔵2
8日	館外実習	登山道トレッキング
9日	資料の扱い方	古文書資料
10日	館外実習(施設見学)	山梨県立博物館、他
11日	実習総括	

富士吉田市歴史民俗博物館 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

開館時間/午前9:30～午後5:00 (午後4:30迄入館可)
休館日/火曜日(祝日を除く)、祝日の翌日(日曜・祝日を除く)、12月28日～翌1月3日

観覧料/大人300円(団体240円) 団体割引は20名以上に適用
小中高生150円(団体120円)

交通案内/●中央自動車道河口湖I.Cより車で10分
●東富士五湖道路山中湖I.Cより車で10分
●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面バス15分、サンパークふじ下車



タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことは「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものとされています。